

聖書：申命記 15章 1～6節

1 七年ごとに負債を免除する

明けましておめでとうございます。新しい年の最初に、主の御声をともに聞いてまいります。

聖書には、何年ごとにこのようなことをしなさいと言うような命令がいくつか記されています。今日はその一つを取り上げます。

1節。「七年の終わりごとに、負債の免除をしなければならない。」

年の初めから借金の話で恐縮なのですが、昔の日本では大晦日までに借金を返さなかったなら、その借金は翌年に持ち越されるという風習がありました。大晦日が近づくと、店から借金の取り立てがやってきます。お金がある人はその日に返します。しかし返すお金がない人は居留守を使ったり、その日だけどこかに隠れてしまう。そうするともう一年、借金を返すことを待つてもらえる。そんな習慣でした。大変おらかな時代だったと言えるでしょう。

あるひとりの生活保護を受けられている方から話をうかがったことがあります。その方は、いろいろなところに借金があつてそれを毎月返さなければならない。そうしたらアパートの家賃を払えなくなり、裁判所に訴えられているのだと言っていました。それを聞いて私はなんとも複雑な思いになりました。

聖書には七年の終わりごとに、負債を免除しなければならないと定められています。それも、借金をしている本人に代わって、その親や兄弟から取り立てるようなことはしてはならないともあります。9節は、もっと徹

底的です。免除の年が近づいたので、借金を踏み倒されるのを恐れ、貸し渋ってはならない。もしそんなことをしたらあなたは有罪なのだとかえあります。今、銀行家とか経済の専門家がこの箇所を読んだら、鼻で笑ってしまうような常識外れな事が堂々と書かれています。

2 主の祝福とは

そんなことを七年ごとに繰り返していたらどうなるのか。借りる方も、最初から返すつもりもなく借りっぱなしになる。そうやってモラルは低下し、結局経済は破綻するに決まっている。それがこの世の常識です。神はどのような目的でこのようなことを言われるのでしょうか。

4節にあります。「そうすれば、あなたのうちには貧しい者がなくなるであろう。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えて所有させようとしておられる地で、主は、必ずあなたを祝福される。」

神の国の中に貧しい者があつてはならない。そのためにあなたがたは七年ごとに負債を免除しなければならないのだと、その目的をはっきり語っています。

この世界には、経済的に貧しい人たちがいて、そのような人たちが普通の生活ができるようになればと私たちも願っています。でも理想と現実のあまりの違いに私たちは無力感を感じます。

しかし、私たちの神はそうではありません。どんなに理想と現実がかけ離れているよう

に見えても、あきらめる方ではありません。主はご自分の国の中に貧しい者があってはならないと心を痛められます。貧しい者に心を留め、貧しい者のために心を砕いてくださいます。

私たちは「主の祝福」と聞くと、神が自分を祝福してくださる。神が自分の家族を祝福してくださる。そんなふうになにか祝福の雨が自分の周りに降ってくることをイメージするかもしれません。しかし、主が思っておられる祝福はそのようなものとは違うようです。主が見ておられるのは、もちろん私たちひとりひとりですが、それと同時に全体も見ておられます。「私たちは祝福されました」と喜んでる傍らに、貧しい者が苦しんでいる。それは神の国の中にあってはならないことなのです。貧しい者がひとりもいなくなったとき、主の祝福を完全に受けることになる。だからあなたがたは、七年ごとに負債を免除しなさいと言われます。

3 主の祈り

この戒めは借金ということにとどまる話ではありません。もっと大きな広がりを含んでいます。先ほど共に祈った主の祈りの中にこうあります。「私たちの負い目を赦し下さい。私たちも、私たちがに負い目のある人たちを赦しました。」負い目とは訳していますが、もともとは借金を指すことばです。主の祈りと今日の申命記には深いつながりがあります。

旧約の時代、「七年ごとに負債を免除しなさい」と言われたことが、「私たちに負い目のある人たちを赦しました」との告白につながっています。

私たちの心の内には、人を赦せないさまざま

な思いが煮えたぎっています。人を赦すことができるなら、どんなにか人生が楽になるだろうかとさえ思うことがあります。主の祈りを祈りながら、毎週心を刺されます。赦さなければならぬことは頭ではわかっています。あの人を赦せるようにと祈ります。でも赦すことは難しく感じます。

主はどうしてくださるのでしょうか。主が貧しい姿をとられて私たちのところに來られたことを思い起こします。まるで主ご自身が私たちに大して借金を負い、返せなくなっているかのような姿をとっていたことに気がつきます。この方が十字架におかかりになったとき、私たちの方が裏切られたかのように感じ、この方に対して、「借金を返してもらおうではないか」と言って怒りをぶつめました。主はそのような私たちであっても赦して下さいました。

赦せないという思いを抱えている限り、私たちは主の前で「貧しい者」であることを認めざるを得ません。

このことは、人についても言えます。他の人たちに対していろいろな意味で借金を負ってしまった者です。返すことのできません。そのことで苦しんでいます。その点でも貧しい者なのです。

でも主はその事をあわれんでくださり、七年という期限を区切ってください、免除の年を与えてくださると言ってくださいます。永遠に苦しむのではない。必ず、免除される日が訪れる。そのときこそ完全な主の祝福をいただくときののだと言われます。

新しい年も、貧しい者にも主の赦しが与えられていることを思い起こしながら、歩んでまいります。